2011 年度 ITP-EUROPA 派遣報告書

氏名：水沼修（東京外国語大学博士後期課程）
派遣先：リスボン大学（ポルトガル）
派遣期間：2011 年 9 月 24 日～2012 年 9 月 5 日

派遣の概要：

2011 年 9 月より約 11 ヶ月間，ポルトガルのリスボン大学博士後期課程において，博士論文研究テーマに係る調査研究を行った．本学とリスボン大学の間で締結予定の共同学位授与制度の利用を前提に，派遣地到着後，速やかに同学博士課程の入学申請を行い，その後，必要な事務手続き等を経て，2012 年 1 月に正式に入学が認められた．なお，派遣先であるポルトガル大学文学部博士課程（ロマンス語学・一般言語学科）では，同学の Esperança Cardeira 先生（歴史言語学）及び Rui Marques 先生（意味論）に指導教員をご担当いただいた．

研究テーマ
博士論文研究テーマは「中世ポルトガル語の複合時制」であり，研究の主要目的は，大規模な資料体を利用し，中世及び 16 世紀以降のテキストに現れるポルトガル語の複合時制形式に関し，それぞれのテキストの文献学的性質を考慮した上で，個々の例を形式的・意味的側面に留意しつつ詳細に調査することで同形式の発展のプロセスを跡付けることである．

派遣の目的
共同学位授与制度に基づき，文献学研究およびポルトガル語通史研究に関し，歴史と伝統があるリスボン大学の博士後期課程に入学し，博士論文を執筆する上で必要となる知識を習得する．また，同課程の指導教員による論文指導のもと研究を行うことで，博士論文の調査をより確かなものとする．

活動概要：

派遣先での主な活動は， 大学院や学部の授業・ゼミへの参加， 図書館での資料収集， 指導教員との面談， 論文執筆作業であった．

授業・ゼミへの参加
報告者が参加した授業・ゼミは，「コーパス言語学」，「文献学」，「ポルトガル語史」，「統語論」等である．これら授業・ゼミへの参加を通じて，博士論文執筆のために必要な知識を多く得ることができた．特に「コーパス言語学」及び「文献学」のゼミでは， コーパスや校訂本の作成等の作業を通じ，今後，電子化されていないテキストを調査対象とする場合に必要となる知識を修得することができ，非常に有意義であった．なお，「文献学」のゼミの参加者によって作成された校訂本（*Breve Memorial dos Pecados de Garcia de Resende*:）は，リスボン大学文学部のウェブサイト（http://www.fl.ul.pt/pct-edicoes-e-estudos）に掲載されている．

資料収集
日本で閲覧することが困難または不可能な資料を中心に資料収集を行った．特に，ポルトガル語の複合時制を扱った学位論文（修士論文・博士論文）等，これまで調査が難しかった先行研究や最近発表されたばかりの研究等を閲覧・収集できたことは非常に貴重な経験であった．また，電子化コーパスに収録されているテキストの元資料に関し，その文献学特徴や校訂本の確認等の作業を行うことができた．これらの作業は，主にリスボン大学文学部付属図書館，国立図書館，国立古文書館等で行ったが，書店で入手可能な資料（校訂本等）の幾つかは，専門書を扱う書店・古書店等で購入することができた．また，グルベンキアン財団の支援により刊行が予定されている『ポルトガル語文法（仮題）』の著者の一人である，リスボン大学言語学センターの研究員のご好意により，刊行前の原稿を閲覧する機会を得た．自分の研究と関連のある分野（特に文法化に関する項目）の記述を参照することができたことは貴重な体験であった．

指導教員との面談
指導教員とは，月に 2,3 度の頻度で面談をもつことができた．面談では，主に，調査対象となるコーパスの選定，コーパスに収録されているテキストの文献学的特徴，考察対象となる各項目（ポルトガル語における複合時制の形成，形式における直接目的語と過去分詞の性数一致，複合時制の助動詞としての haver と ter の交替，複合時制以外の形式における haver と ter の用法等）に関する先行研究の問題点や分析の方法論等について，指導教員と意見交換を行った．調査の対象とするコーパスについては，電子化されているコーパスを利用することとなった．それらは，主に 13 世紀から 15 世紀の文学テキスト及び非文学テキストが数十点収められている *Corpus Informatizado do Português Medieval*（ポルトガル・リスボン新大学，以下 CIPM），1380 年から 1845 年の期間に生誕した作家による作品が 53 点収録されている *Corpus Histórico do Português Tycho Brahe* （ブラジル・カンピナス大学，以下 Tycho Brahe），16 世紀か

ら 17 世紀にかけての文学作品が数点収録されている *Corpus Electrónico do CELGA - Português do Período Clássico*（ポルトガル・コインブラ大学，以下 CEC-PPC），16 世紀から 19 世紀の期間に記された私用の書簡約 2000 点が収録されている *CARDS - Cartas Desconhecidas, Unknown Lett*ers（リスボン大学言語学センター，以下 CARDS）である．ただし，全体のバランス（時代，レジスター等）を考慮し，必要があると判断される場合には，電子化されていないテキストも調査の対象とすることを検討することとなっている．意味論的観点に基づいた分析（特に直接法現在完了の意味的発展）の方法論等，引き続き協議を行っていく必要がある課題も残されているが，指導教員の先生方との議論を通じ，論文執筆作業過程をより明確にすることができたと感じている．

投稿論文（予定）

派遣期間中に学会誌等への論文投稿を行うことはできなかった．以下の二点については，同期間に執筆作業を行っており，現在，リスボン大学博士課程の指導教員からのコメントを反映させる作業を行なっているところである．これらについては，準備ができ次第，本派遣の成果として， 学会発表または論文投稿を行う予定である．

・「ポルトガル語版『聖杯の探索』におけるヴァリアント（仮題）」
・「中世ポルトガル語テキスト *Vidas de Santos* における haver と ter について（仮題）」

その他

2011 年 10 月に，リスボン市内にあるリスボン新大学において，ポルトガル言語学会の年次大会が開催された．同大会では，多くの研究発表を聴講する機会が得られただけでなく，自分の研究と関係のある研究を行なっている研究者や学生と面識をもつことができ，大変貴重な経験であった．また，これら以外にも，リスボン滞在中に， 学内や学外の多くの研究者と知り合うことができ，さらに，その内何名かとは今後も連絡を取り合えるような関係を築くことができた．本派遣を通じ，今後研究を行なっていく上で重要となる貴重な人脈形成を行う機会が得られたと感じている．

派遣の成果 ：

本派遣を通じ，先行研究の整理，コーパスからのデータ抽出作業，データの分析に関し，それぞれ以下のような作業の進捗が見られた．

先行研究

ポルトガル語の複合時制の発展を扱った先行研究についての調査を概ね終了し，現在は，これら先行研究について，博士論文の一つの章の形にまとめる作業を行なっているところである．また，その他のロマンス諸語における複合時制の発展，文法化に関する理論的研究等については，引き続きフォローしていく予定である．

データ

CIPM に収録されている全作品，Tycho Brahe のほぼ全作品について，haver 及び ter が過去分詞を伴う形式の全例の抽出作業を終了した．これら２つのコーパスについては，haver 及び ter のその他の用法についても，現在，抽出作業を行なっているところである．その他のコーパス（CEC-PPC, CARDS）についても，順次作業を行なっていく予定である．

分析

抽出できたデータ（13 世紀～16 世紀）については，形式的特徴（直接目的語と過去分詞の性数一致，形式の各要素の語順等）ごとに分類，整理を行なっている．現在，これらをもとに，先行研究の記述を検証する作業を進めている．なお，意味論的観点に基づく分析については，より客観的な分析を目指し，指導教員の先生方とその方法論を協議しているところである．

今後の課題：

本派遣で得られた成果を踏まえ， 博士論文執筆作業に尽力していきたい．当面は，データ抽出作業及び先行研究の記述の検証を継続して行なっていく． また，意味論的観点に基づく分析については，指導教員の先生方と協議の上，その方法論を確立した上で，分析を進める．これらの作業がある程度整理された段階で，電子化されていないテキストを調査対象とする必要があるかについて，指導教員の先生方と再度協議する予定である．

なお，リスボン大学博士課程では，課程 2 年終了時（2013 年 12 月）に中間報告を行うこととなっている．先生方との協議をしっかりと行い，同報告に向けきちんとした準備を行なっていきたい．